

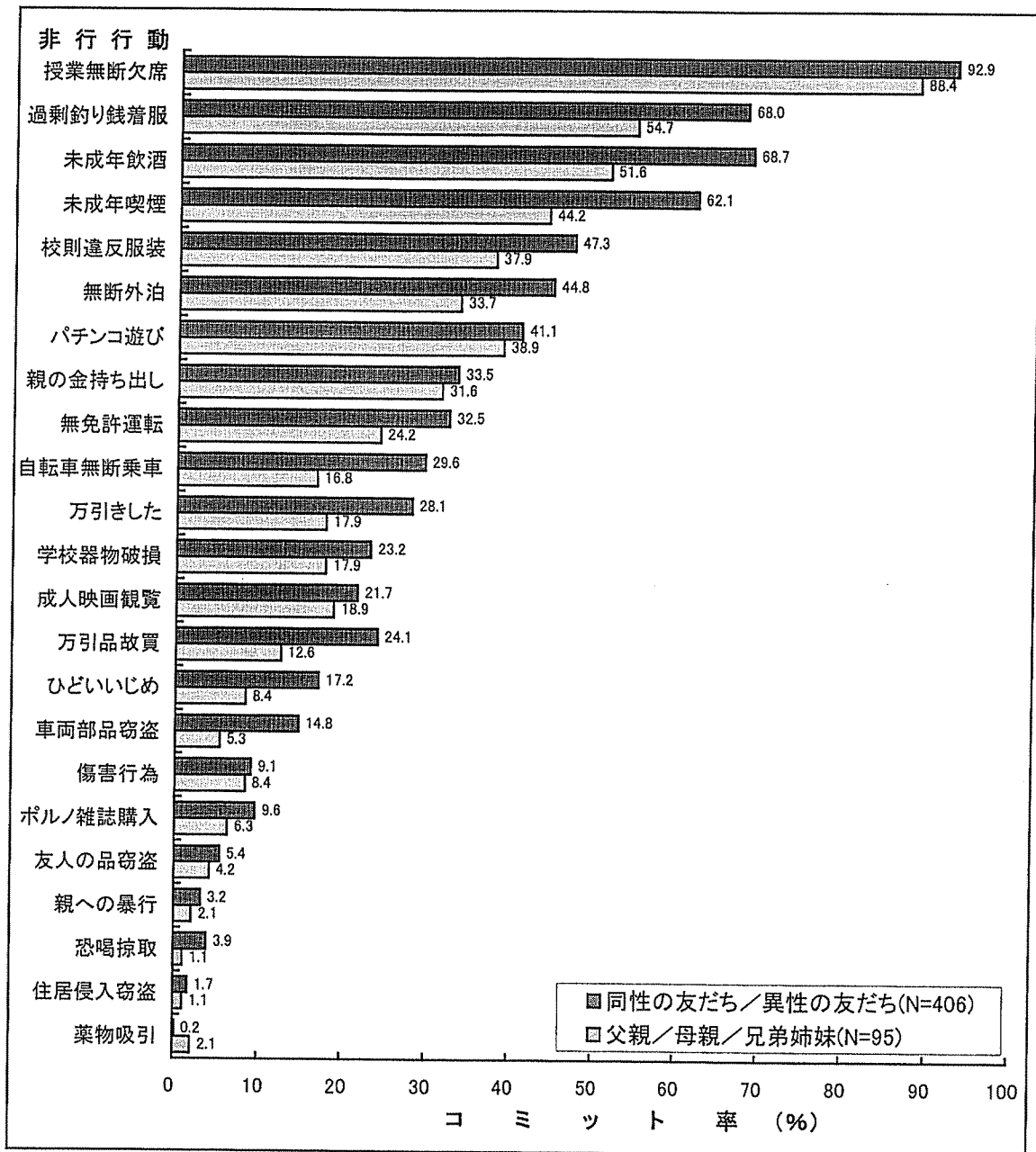
## (2) 社会関係と非行行動

### ① 友人関係

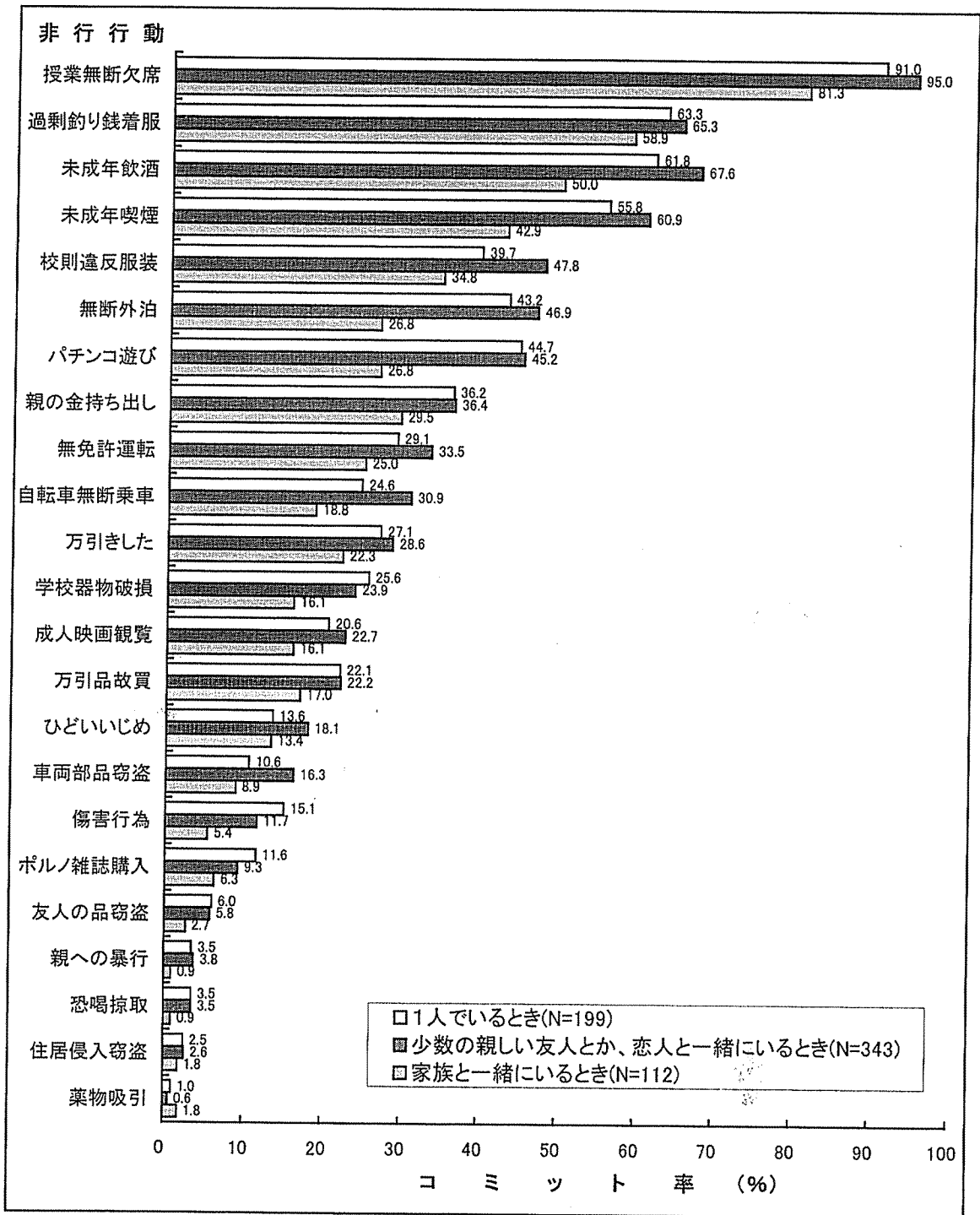
今回の調査の対象者となった大学生においては、彼（女）らの最も重要な準拠集団が友人たちであることが明らかになった。すなわち、悩み事を相談する相手としても、一緒にいて最も安らぎを感じる対象としても、友人を挙げる者が最も多く、また過半数の者が、一番恥ずべき行為として友人に対する裏切りを挙げ、最もストレスを感じる場合として友人関係の齟齬を指摘している。

そこで、こうした友人関係が、彼（女）らの非行行動へのコミットメントを抑制する働きをしているのか、それとも促進する要因となっているのか、という点を検討してみた。今回の調査結果からみる限り、友人を準拠集団としている者は両親などの家族に準拠している者に比べて、多くの非行的行動においてコミットの率が高かった。つまり、友人関係は非行行動を抑制するよりは促進する要因として機能している可能性が高いといえる。

(図表 54) 悩みの相談相手別非行行動

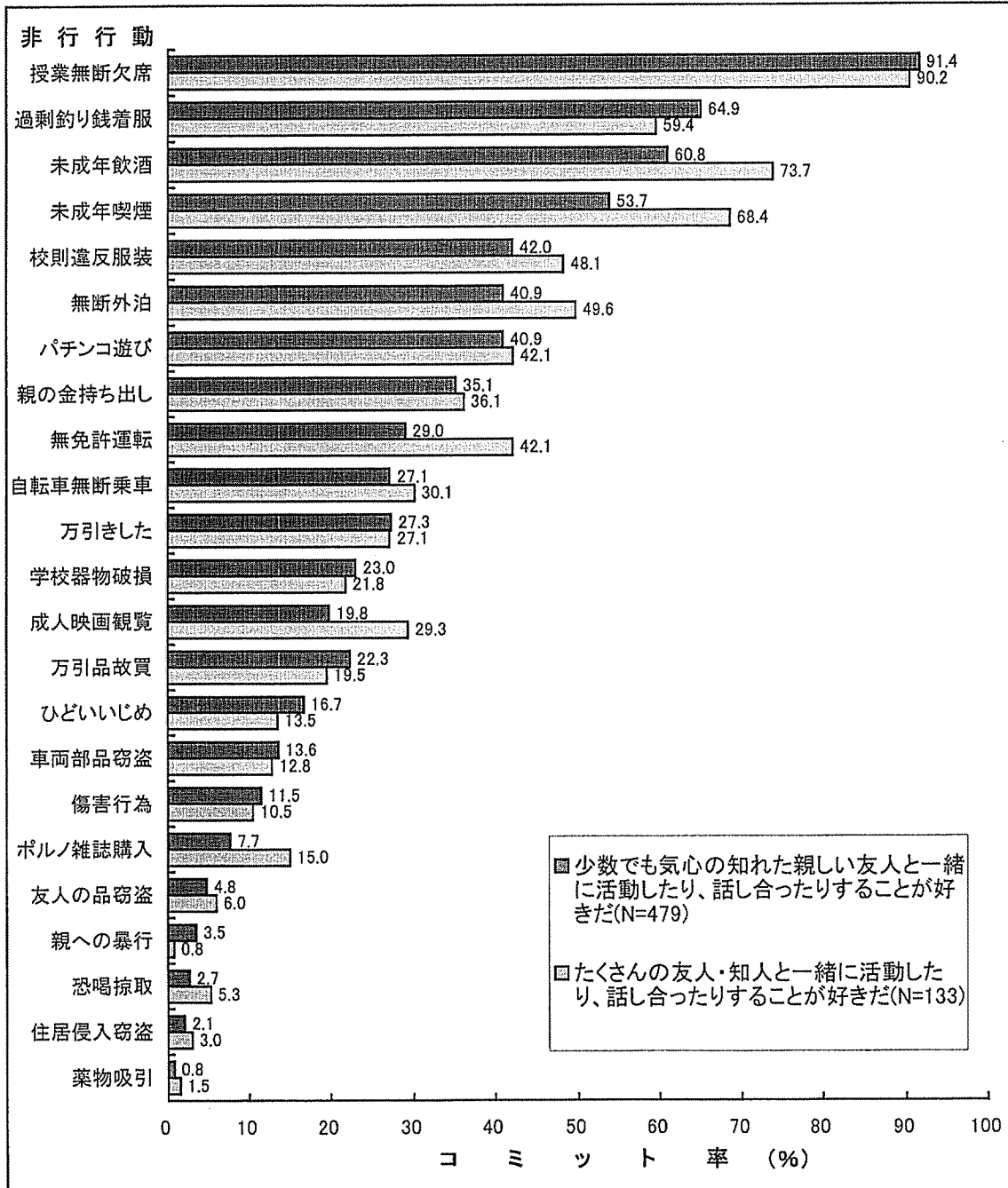


(図表 55) 安らぎの場別非行行動



しかも、大勢の友人との交流を好む者の方が、少数者間の親密な友人関係を好む者よりも、いくつかの非行行動においてコミット率が顕著に高い。

(図表 56) 好ましい友人関係別非行行動



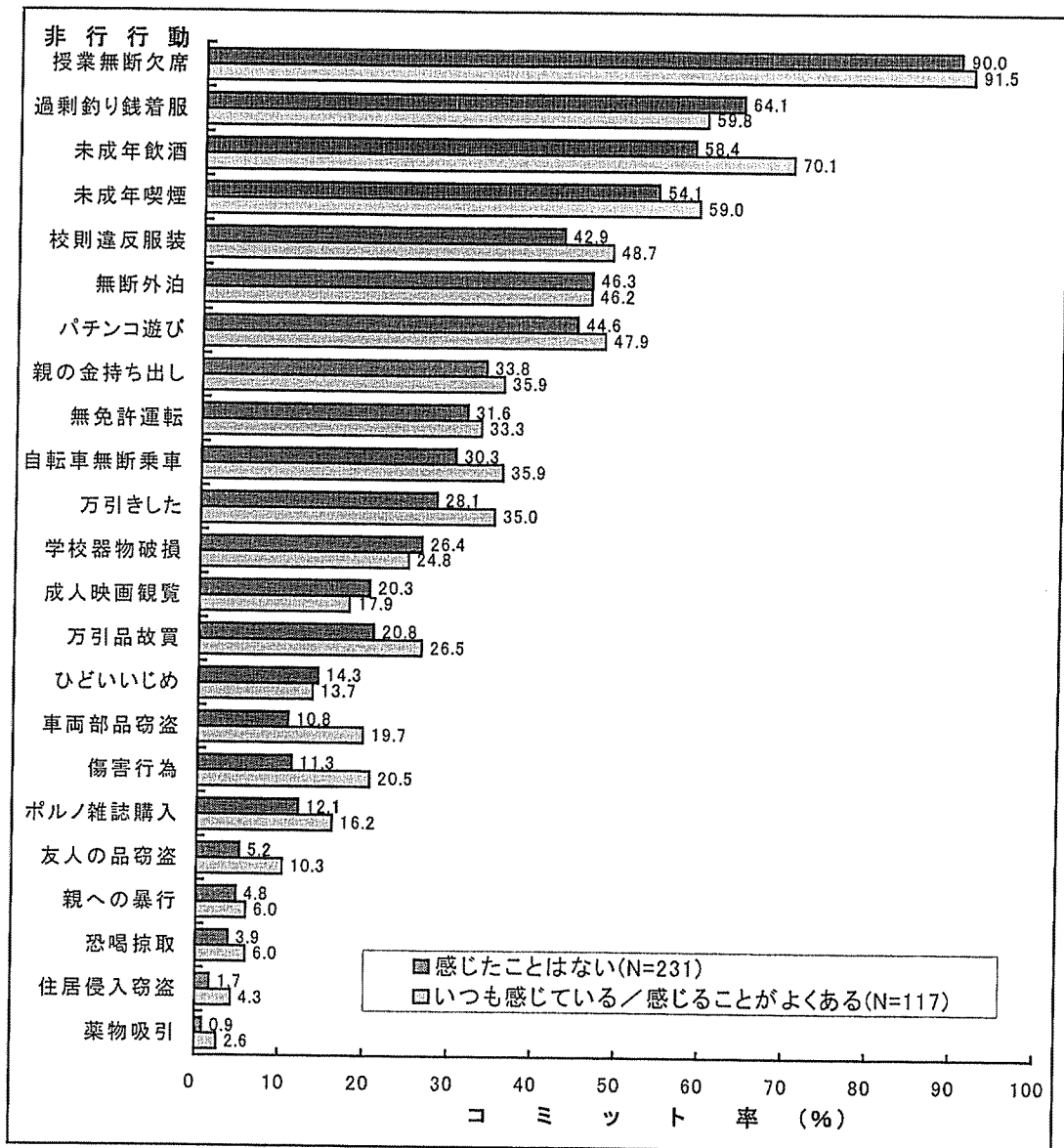
成長に伴い家族を離脱して、社会に参入していく青年男女にとって、友達仲間は良きにつけ悪きにつけて準拠集団として機能する。そして、家庭や学校において良しとされた規範への抵抗の酵母ともなる。友人関係を重視する回答者が非行的行動にコミットする傾向も強いということは、家庭からの自立を志向する過程における若者達の、むしろノーマルな姿ではないだろうか。

## ② 親との関係

一方、彼（女）らが身体的にも心理的にも離脱しつつある親との関係は、非行行動とどのような関係にあるだろうか。先にみた3項目、つまり「親からの強制度」、「親の期待の負担感」及び「親の叱責に対する反応」のそれぞれについて、非行行動へのコミットメント率との関係性を検討してみた。その結果、まず親からの強制作感を強く感じていた者の方が、あまり強制度を持たなかった者に比べて、殆どの項目においてコミット率が高い傾向がみられた。ただ、両者の差は極めてわずかで、この傾向がどれだけ一般性をもつかは判断しにくい。また、親の叱責に対する反応に関しても、非行行動へのコミット率との関連性は特に見出せなかった。

これらに対して、親からの期待を負担に感じている程度と非行行動コミット率との間には、半数弱の項目において、負担感の強い者のコミット率が相対的に高いという傾向がみられた。

(図表 57) 親からの期待に対する負担度別非行行動

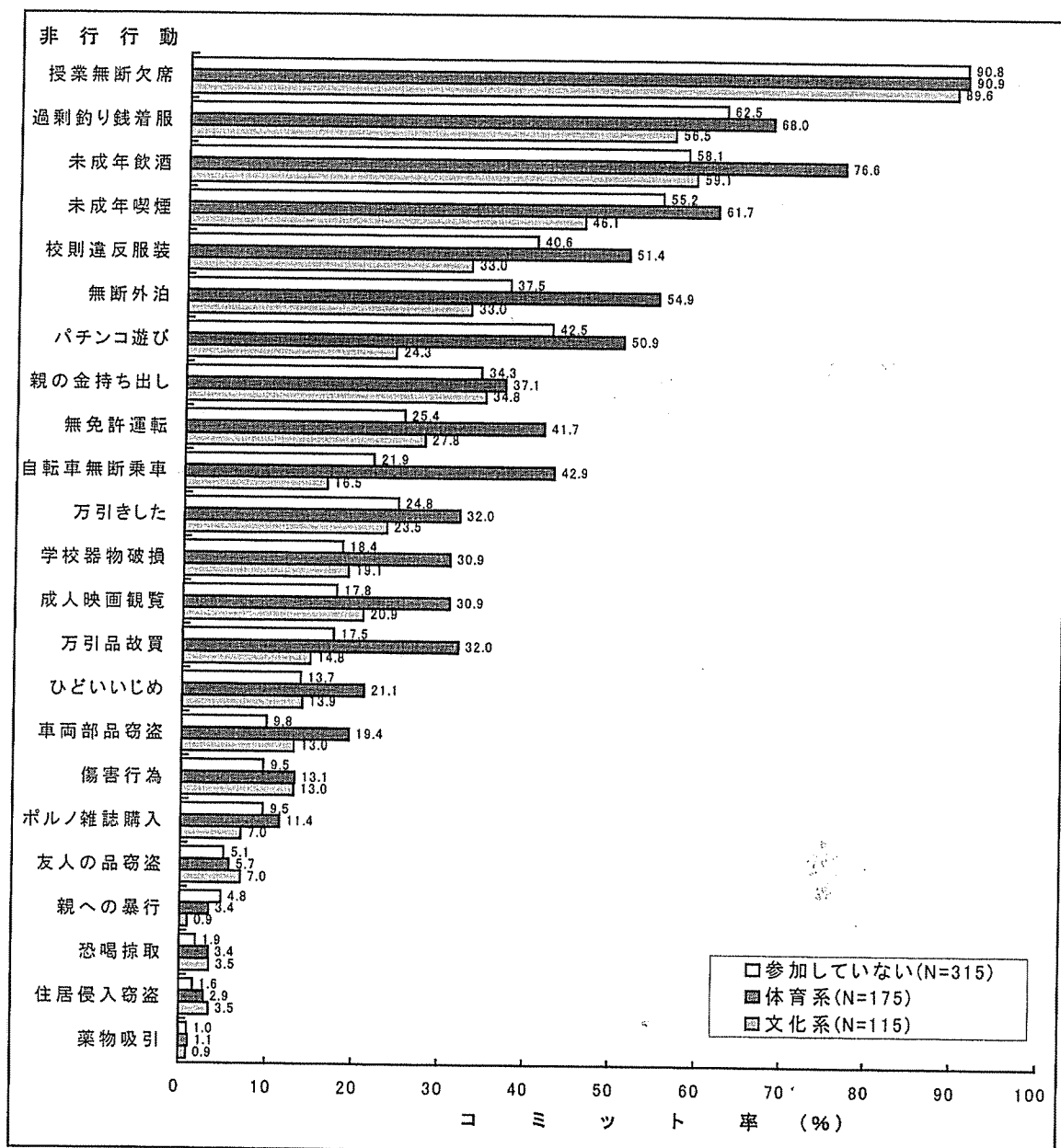


家庭におけるフラストレーションが、友人との交流における解放感と相俟って、非行行動へのコミットメントの促進要因となるのであろうか。

### ③ サークル参加

最後に、サークル参加と非行行動との関連性についてみると、体育系のサークルに参加している者が、文化系サークルの参加者及びサークル非参加者に比べて、多くの項目においてコミット率が高い。体育系サークルにおける連帯感の強さ、活発な行動性などの特性が、非行的な行動への抑制力をしばしば弛緩させるのかも知れない。

(図表 58) サークル参加別非行行動



なお、サークル参加やボランティア経験などとの相関がみられたリーダーシップ特性は、非行的行動へのコミットメントとの関連性は殆ど見出せなかった。